

特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

## 「避難者交流サロンを市民と避難者の交流サロンへ転換する」事業

### 被災地からの避難者も地域の1人として共生するために 交流サロンや様々な活動を通して関係を深める

2011年の東日本大震災、原発事故の発生直後から千葉県松戸市内に避難してきた人々を支援しているNPO法人や市民団体が一つになって結成した「東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト」。現在、千葉県東葛飾地域に居住する広域避難者の支援に活動の幅を広げ、さらに新たな取り組みも始めた。



被災者交流会を告知するチラシ



定期的に被災者同士の交流や相談会を行っている

#### 避難者と一言ではくれない現状の中で より個別性の高い支援態勢構築の必要性

全国避難者情報システムによれば、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故によって千葉県東葛飾地域5市に避難している人の数は1,156人となっている。その内訳は、松戸市261人、柏市438人、我孫子市70人、流山市223人、野田市164人で、それを避難元別に見れば、福島県1,022人、宮城県68人、岩手県42人、その他24人である(2017年11月30日現在)。

この数字はあくまでも統計として合計したものであり、たとえば原発事故の場合、避難指示区域からの避難者、それ以外の区域からの自主避難者など、事情や背景の異なる避難者が混在している。さらに大震災から7年が経過し、その避難者のあり様も様変わりしつつある。「もはや、『避

難者』という一言ではくれない」と、事務局長の奥田義人さんは話す。

「避難者のみなさんの意識の多様化、多極化が拡大しています。大きく分ければ、あくまでも避難を帰還までの一時的なものとする見なす人、避難先に定住を決めた人、避難先から新たな定住地を求めて移住する人など、仕事や家族形態、帰還後の生活環境などによって、その考え方は千差万別であり、一律に避難者と位置づける表層的な見方では整理できない複雑さがあります」

将来的に帰還、定住、移住と、いずれを選択するにせよ、避難者が日々、暮らしているのは、現にいま住んでいる地域社会である。そこで一人の地域住民として生活を営んでいけるよう、これからは「個別性のある支援態勢が求められる」と、奥田さんは話す。

#### 交流の拠り所となる開放的なサロンを運営しつつ 避難者と市民が一層深く関わる道を模索

その基本となるのは、避難者の話を聞いたり、避難者同士、あるいは避難者と支援者が交流するための拠り所となる場所だという。そのために松戸・東北交流プロジェクトでは、JR松戸駅そばで「黄色いハンカチ」という交流サロンを運営している(2018年5月にJR北小金駅前に移転)。毎週月～木曜の10:00～16:00オープンで、利用料は200円(飲み物とお菓子付)。「孤独にさせないことをモットーに、一人でやってきても、そこにいる人と気軽に交流でき、地域と関わるための第一歩となるような雰囲気づくりを心掛けています」と、奥田さん。運営には12名の運営委員があたるが、そのうちの6名は避難者が担っているという。

このサロンを拠点に、松戸・東北交流プロジェクトでは、手芸、囲碁、園芸、歌唱、健康などのやりがい講座、避難者・市民の手作り品の販売、避難者交流会、相談会、自

主避難者交流会、防災講座、支援コンサートなど、様々な支援活動や交流活動に取り組んでいる。南相馬市からの自主避難者である副代表の高田良子さんは、「交流や活動を通じて、ここに集う人の心が『個』にとどまらず、『公』を考えようという気持ちに変わっていくのがすばらしい。受け身だけでは、人は変わることができません。その意味で、自分のあり様を考えるきっかけづくりになっていると思います」と、自分たちの活動を振り返る。

松戸・東北交流プロジェクトでは、従来から暮らしている市民同士の絆が希薄化しつつある現状を踏まえ、この傾向を打破する手がかりとして、避難者と市民との交流の場としてサロンを活用することで、単なる避難者支援という枠を超えた市民活動へと展開していくことに取り組んでいる。そのための広報活動費や講師・ボランティアへの謝礼を中心にAJOSCの助成が役立てられた。



被災者やスタッフが参加しクイズ大会やミニコンサートを行った活動報告会



医師を招いて相談会なども実施

助成団体: 東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト <http://yellowhandkerchief.web.fc2.com>



#### 避難者と関わり続けることで3.11以前／以後の変化を忘れない

今回の助成申請をきっかけに、AJOSCが続けてきた活動を初めて知り、驚いています。われわれの活動資金はAJOSCのような機関からの助成や補助金に頼らざるを得ないのが現状ですが、そこに甘んじることなく、避難者支援のためにも収入を図る方向に持っていきたいと思っています。今回の助成でその態勢づくりに着手できました。ありがとうございます。

東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト  
事務局長 奥田義人さん